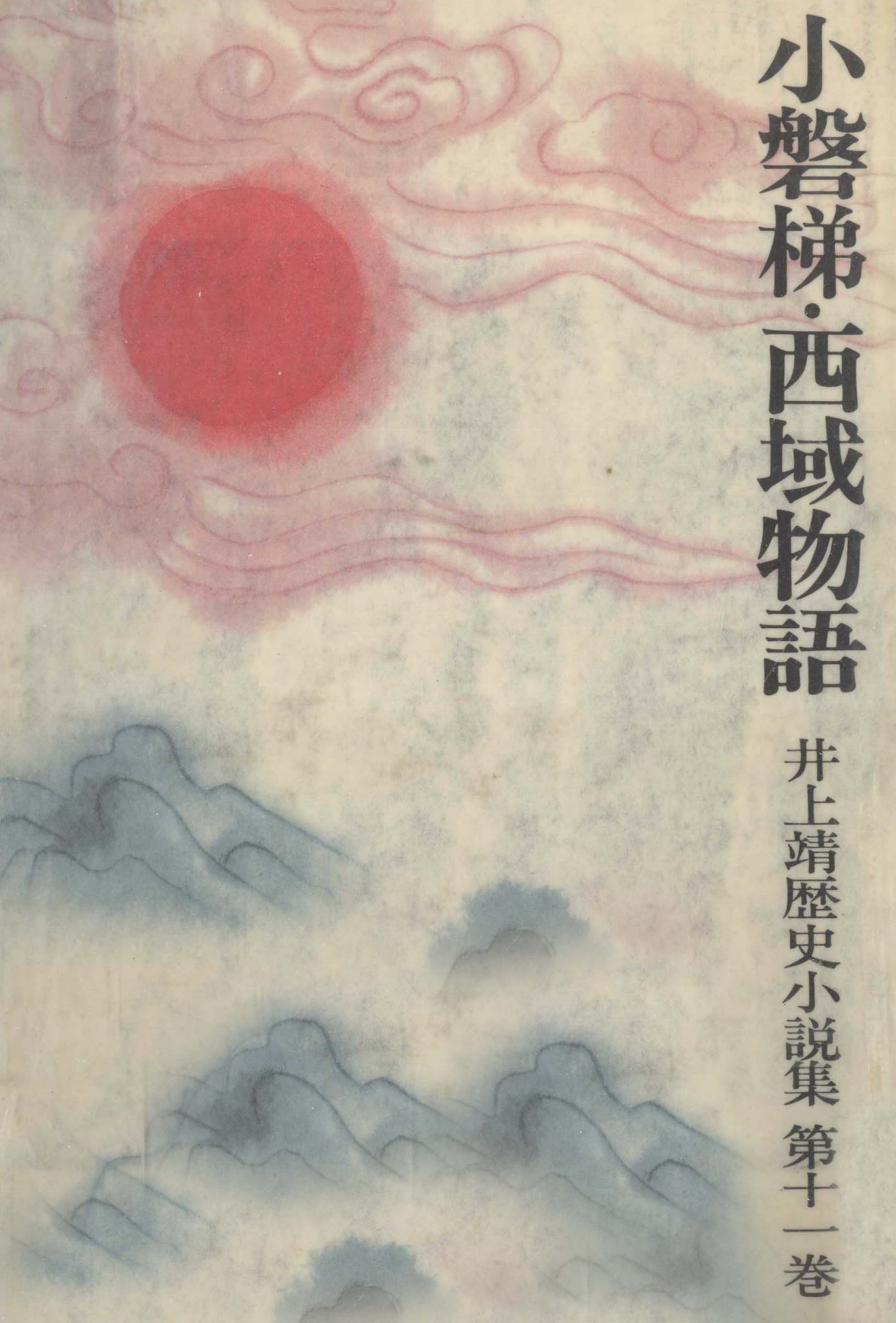




小磐梯・西域物語

井上靖歴史小説集 第十一卷

井上靖歴史小説集第十一卷

小磐梯・西域物語

岩波書店

井上靖歴史小説集 第十一卷 第十一回配本(全十一卷)

一九八二年四月三十日 第一刷発行 ©

定価 四〇〇〇円

著 者 井 上 靖

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
発行所 鉄 岩 波 書店

電話 〇三・五五二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

澄賢房覚書

1

小磐梯

55

北の駅路

87

考える人

109

西域物語

145

序章(147)

大宛の汗血馬 1 (156) 大宛の汗血馬

2 (167)

天山の湖(180) サマルカンドの興廢 1

(204)

サマルカンドの興廢 2 (216) サマルカン

ドの興廢 3 (227) サマルカンドの興廢 4 (250)

西域の詩人たち 1 (265) 西域の詩人たち 2 (274)
隊商の街 1 (284) 隊商の街 2 (292) 隊商の街 3
(300) 終章 (310)

西域詩篇

漆胡樽 (320) シリア沙漠の少年 (324) 落日 (326)
エトルスカの石棺 (328) 地中海 (330) 白夜 (332)
インダス河 (334) ポンペイ (336) コリントの遺
跡 (338) ホタル (342) 旅から帰りにて (344) 沙
漠の街 (346) 陝西博物館にて (348) 颯秣建國
(350) 約束 (352) 廢墟 (354) 遠征路 (356)
トルコの沙漠 (358) カスピ海 (360) 鏃形の石
(362) ターバンの老人 (364) ペルセポリス (366)
ビストの遺跡 (368) 古都バルフ (370) アム・ダ
リヤ (372) 生きもの (374) 遊牧民 (376) クン

ドウズの町(378) 白竜堆(380) 交脚彌勒(382)
 飛天と千仏(384) 幻の湖(386) 胡旋舞(一)(388)
 胡旋舞(二)(390) 千仏洞点描(392) 四月八日(394)
 フンザ溪谷の眠り(396) シルクロード(398)
 天池(400) ソバシ故城(402) タリム河(404)
 精絶国の死(406) 胡楊の死(408) 若羌^{チャルクリク}(410)
 米蘭^{ミラン}(412) 人生とは(414) 街灯(416) 合流点
 (418) もしもここで(420) バルフの遺跡にて(422)
 羌(424)

あとがき

澄賢房覺書

私はこの冬久しぶりで紀州高野山に登った。この前登ったのは京都の大学の卒業前年の秋だったので、それからいつか十六年ほどの歳月が流れているわけである。学生の頃は専攻が美術史だった関係もあって、何回か高野を訪ねる機会があり、時には十日以上も滞在したこともあった。そんなわけで高野は私にとっては文字通りの會遊の地であって、久しぶりでここの土を踏むことにはなんと言っても感深いものがあった。

と言って、何回か高野を訪ねたといっても、何分学生時代の事とて何処を定宿にするというのでもなく、その時出任せに方々の寺院の宿坊しゆくぼうの世話になったので、格別昵懇な寺があるわけでも、親しい知人が一人あるわけでもなかった。

バスを女人堂にょにんどうで降りて、だらだら坂を金剛峯寺こんごうぶじの横手へ降りて来る頃は短い冬の陽脚ひあしが既に落ちて、寒々と薄青く澄んでいる暮方の空に千年の高野杉の梢が墨絵のようにくっきりと黒く浮かんでいた。

私は土産物を鬻ひきいでいる一軒の店で訊いて、壇場伽藍だんじょうがらんの南方にあるM院という比較的小さい寺を宿に選んだ。そして寺のひと間へ落ちてから、ふと大学時代の友の一人が、ここの大学の教師か講師か

をしている噂をいつか誰からか聞いたような気がして、茶を運んで来たこの寺の息子だと思われる学生服の青年にその友のことを訊いてみた。

「吉村さんって、吉村嘉章さんのことでしょうか」

そう言って、

「その方なら仏教概論の先生で、私たちも教わっています」

と言うことだった。高等学校の同級生ということだけで、大学時代特に親しくしていたわけでもなく、同じ文学部といっても専攻が違っていたので、教室で顔を合わせることも極く稀で、卒業前の何かの会の時一緒に酒を飲み、会が終わってからどうしたわけか二人で四条の喫茶店に入ったのを記憶しているが、その一夜が後にも先にも唯一回の、私と吉村嘉章とが打ち解けて話をした機会のようであった。

併し会えばお互に懐しいには違いなかった。早速その寺の学生に電話をかけて貰い、明日でもお目にかかり度いと言ってやると、先方はひどく懐しがって、明日と言わず今夜にも是非遊びに来てくれと言う事だった。

私はほんの暫くのつもりで東京を出たのだが、たまに来た関西のこととて改めて見ておきたいと思う所も多く、会っておきたい友達もあって、それやこれやでいつか二十日近くも京大阪や奈良をぶらついて仕舞うことになり、その挙句にこの高野まで足を伸ばして来ていたので多少旅の疲れがないこともなかったが、折角先方がそう言ってくれるので、寺で夕食を済ませてから、宿舎から三丁程離れているK

院に吉村嘉章を訪ねて行った。K院と言っても、現在は寺ではなく、廃寺になった寺の建物を普通の住宅に改造したもので、以前からの慣習で未だに吉村嘉章の住居はK院という昔の呼び名で呼ばれている風であった。

私はその晩これも十六年ぶりで、頭がすっかり禿げ上がって仕舞って往きずりに会ったら到底彼とは見分けがつかない程ひどく老けてしまった吉村嘉章と彼の書齋で酒を飲んだ。私は大学の専攻から外れて文学の方に足を突っ込んでしまったが、吉村は生家が寺であった関係もあって、大学時代の専攻をそのまま今日まで勉強し続けて、私などよくは知らなかったが、彼自身の話でも、ここへ案内してくれた先刻の学生の口振りでも、密教の事相に関する分野では既に吉村は学界の一方の權威であるらしかった。

その晩私は吉村の書齋で全く偶然に実に思いがけないものを発見したのであった。私は後になってこの事を考えてみて、別段これと言って用事もないのにふと高野へ登る気持になったのも、また高野へやって来て宿坊に落ち着いた瞬間、それまで思い出したこともなかった大学時代の友がこの土地にいることを思い出したのも、多少そこに奇異な気持がしないでもない。何ものかに約束されてあったような、単に偶然とは言いい切れないものを感じるのであるが、それはまあそれとして、私が吉村の書齋で発見した二枚の古い日記の断片のことから話を進めて行くことにしよう。

私は人と話をするとき相手の専門の領域に話題を持って行く習慣がある。文筆家の持つ一つの共通の習性であるか、それとも若い時から好奇心の強い私自身の特殊な性格の然らしむところか知らないが、

兎も角相手の専門の領域の話を聞くことが好きである。専門家から専門の分野のことを聞くのであるから何と言っても一番間違いないわけで、その点自分自身の勉強にもなるし、面白くもあり、思いがけない興味を全く未知の対象から発見すること屢々である。その晩も私は吉村嘉章から高野の古文書や典籍などについていろいろ興味ある話を聞いた。高野に関する古いことを験べるには修禪院懷英の『高野春秋』とか、『検校帳』とか『高野物語』とかいろいろの書物があって、それらはいずれも印刷物になって世に公にされてあるが、最近『折負輯』という全く今までに誰にも知らされていない写本十巻が発見されたということである。その『折負輯』なるものは一口に言えば天保六年までの高野諸寺院の過去帳を輯めたものであって、その資料的価値に至っては量り知れないほど大きいものがあり、取りあえず吉村はそれを書き写しておくことにして、最近金剛峯寺の書庫からそれを持ち出して来て、毎晩そのために何時間かを割いているということであった。

「まあ古文書に関することでは最近の高野ではこれが一番のビッグニュースでしょうか。文章も和趣を帯びた漢文で字もなかなか美しい。御覧になりますか」

そう吉村嘉章は言った。門外漢の私は、金剛峯寺はじめその他の堂坊には今なお手をつけられず未整理のまま夥しい量の典籍や古文書類が包蔵されており、その中からは何が飛び出すか判らないという話を興味深く聞いたが、と言って、特に最近発見されたという『折負輯』なるものの内容にまで立ち至っての興味は勿論持っていなかった。併し吉村嘉章が多少興奮さえ混じえて語っている様子を見ると、結

構ですとも言い兼ねて、兎に角その写本十巻を見せて貰うことにした。

吉村は座を立て、書庫にしてあるという奥の六畳の部屋へ入って行ったが、やがて一抱えの古い和本の束を持って来た。私はそれらの手垢にまみれた見るからに古色蒼然たる何冊かの写本を取り上げ儀札的にばらばらと頁をめくっていたが、何冊目かに手にしたそれらの中の一冊に、私は二枚の和紙が挟まれてあるのを発見した。そしてそれを何気なく拡げて、それに視線を当てたのであったが、その瞬間私はおやと思った。黄色く変色した和紙の一枚には、一行五、六字の大ぶりの書体で、十行ほどに日記らしいものが認められてあるのであるが、その中に澄賢房ちやうけんぼうという三字を眼に留めたからである。

十月二十四日、天晴、曉薄霜あり。庭儀灌頂ていぎくわん習礼しゆらいの日、親王院への途次、澄賢房に会ふ。五十余年の再会なり。夜、ひそかに、澄賢房、院に來たる。面晤めんご数刻すうにく、茶を喫す。

私は他のもう一枚を拡げてみた。それにはやはり同じ書体で次のように認められてあった。

十月二十六日、大門より二里の山中に、見かけぬ老人、凍死せるものありとの評判、自ら死せるか、行き倒れか、不あきら明かならずといふ。亡者の心知る能あたはず。可あはれ哀むべし。終日心重し。光言念誦くわんじゆ、回向あかう申入る。

私は曾て学生の頃であるが、澄賢房という全く無名の、江戸末期から明治の末期にかけて生きた僧侶に就いて、ある事から少なからぬ関心を抱いて、この人物の半生を、後で考えてみると不思議に思われる程の情熱で調べてみたことがある。そして澄賢房の生涯の前半については、臆気ながら輪廓だけはあるが、これを索り得たのであったが、その後半については全く窺い知ることが出来ないで今日に至っていた。それがはしなくも今、彼の晩年の消息の一端を誰が書いたか判らぬ古い日記の断片によって眼の前にさし示されたわけであった。

私は吉村嘉章の存在も全く忘れ去った没我の状態で、暫くこの日記の断片に見入っていた。この日記は説明するまでもなく、誰か高野のある僧侶が認めたものであって、これによると、澄賢房は五十年ぶりで高野に登り、この日記の筆者である僧侶を彼の寺に訪ねているのである。そしてその翌々日、自殺したのか、行き倒れになったのか、兎も角も無慙な死体となって高野の山中に発見されているのであった。

一枚の日記には澄賢房とはっきりその名が認められてあり他の一枚にはその名が認められていないので、死体となって発見された人物が澄賢房とは別の人物ではないかという見方も一応成立しそうであるが、併し、この日記の文面を読んでいると、この筆者が明らかに澄賢房という名前を故意に伏せて表面に出さないで書いている気持が、文字の裏からはっきりと読む者の心に伝わって来ると思ふのである。

「終日心重し。光言念誦、回向申入る」というような文節だけを見ても、ここから窺われるものは全く

未知の一老人の死に対する気持とは到底思われない。自分となんらかの関わりを持っていた人物の不幸な死を悼んでいる者の筆である。この日記の筆者は、自分を訪ねて来た澄賢房が、日ならずして哀れな死体となって発見されたのを知った時、澄賢房とはっきりその名を記すことを恐らく躊躇せずには居られない気持になったのではなからうかと思われる。

私は、吉村嘉章に、私が『折負輯』の中から偶然に発見したその二枚の日記の断片を示し、それと自分との関係についてその概要を説明すると、吉村は初め信じられぬ事のようにそれを聞いていたが、聞き終わってから少し居住いを直し、しんみりした口調で、

「不思議なことがあるものですね。何にしてもその澄賢という僧侶はやはり貴方に自分の晩年を知って貰いたかったんでしょね」と言った。

それにしても、私が一番知りたいのは、この日記の筆者が誰であるかということであったが、吉村の語るところによれば、この日記の断片と『折負輯』とは何の関係もないもので、恐らくこの日記の筆者が『折負輯』を繙いた折、何かの拍子にこの日記の断片を差し挟み、そのまま忘れ去って仕舞ったものと思う他はない。『折負輯』は金剛峯寺の書庫の古文書の山の中から発見されたもので、誰がこれを保管していたかは勿論不明なので、その方からこの日記の筆者を知ることが難しいが、併し、明治時代と年代が区切られているし、しかもこれだけ立派な文字を書き得る人物はただ者ではなからうから、明治

の高野の僧侶の墨跡でも調べて行ったら案外簡単にこの日記の筆者が判るかも知れないということであった。

「それに『庭儀灌頂習礼の日、親王院への途次』という一句があるので、この方面からも、調べる途はありましょう。明治年間に親王院で灌頂が行なわれたことはそう何回もありません。と言うのは、灌頂というのは、学僧の最高の試験のようなもので、今でも十三年に一回しか行なわれていません。この日記の筆者は、兎も角、それに出席している。いかなる資格役柄でこの儀式に出席していたかは解らないが、単なる従僧でないことは、この立派な文体と書体から見れば明らかだ。調べる範囲は僅か数人に限定されますよ」

と、彼は言った。そして、まだ二、三日滞在するでしょう、二日ほど猶予を下さい。明日にでも私がこの筆者を調べて上げましようと言ってくれた。

その夜私は二枚の日記の断片のうちの一枚を貰い受けて、かなり遅くなってから途中まで懐中電灯を持った吉村嘉章の見送りを受けて、M院に引き上げた。日記の断片の他の一枚は、これの筆者を調べて貰うために吉村嘉章の手許に残して来たのである。

吉村嘉章と私とは肩を並べて杉木立に挟まれた道を歩いて行った。満天に星はばら撒かれてあったが、道は暗く、吉村嘉章の手許から発している懐中電灯の光の輪が大きく小さく左右に揺れながら暗い道の面を嘗めて行った。

「星が綺麗ですね」と私が言うと、

「空気が澄んでいるので、ここでは星の光が冷たく見えるんです」

と言いながら吉村は一寸立ち止まって改めて空を見上げたが、それにつられて私もふと足を留め空を仰ぐようにした。その瞬間、どうしたものか私は妙に体の中心を失って、ふらふらと二、三步蹣跚^{よろめ}めいて、思わず傍の吉村嘉章の肩に手を置いたのであった。どうかしたんですかと驚いた風の吉村に対して、私はそんな自分にばつの悪いものを感じて、いや一寸と言いながら直ぐ彼の肩から手を離したが、妙にその場に坐り込んで仕舞いたい衝動をその時全身に感じていた。

併しそれに耐えてそのまま、自分でも自分の足許に妙に頼りないものを感じながら、ふらふらと風にも押されるように歩いて行った。

吉村がどうしたんですかと言った時、若し私はその時の気持をありのままに口に出したとしたら、嫌に淋しい気持が天から落っこちて来たのですとも言う他はなかったであろう。実際に、星空を見上げた瞬間、ふいに何処からともなく襲い来った人生の、と言うより宇宙の淋しさのようなものに、私は足をすくわれた恰好だった。

私はそうした気持が何に起因して起ったか、その時ははっきりとは判らなかった。澄賢の死を悼む気持とは少し違っていた。併しやはりそれは澄賢の死に関係する何ものかに基因するもののようであった。杉木立が切れて広い道へ出た時、